

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 8 月 20 日	
所属部局・職	理学研究科 社会生態分科 (霊長類研究所 生態保全分野) 修士課程 1 年
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ブラジル アマゾナス州 マナウス市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
都市残存林における 3 種のサルと植物の相互関係 ～採食生態の違いに着目して～
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 6 月 20 日 ～ 平成 27 年 7 月 17 日 (28 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立アマゾン研究所・Vera M. F. da Silva 教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<研究の概要> 国立アマゾン研究所(ブラジル・マナウス市)の構内にある「科学の森」には、絶滅危惧種のフタイロタマリンを含む 3 種の新世界ザルが生息している。体サイズの異なるそれらの霊長類種は、同じ植物を食べるにしても、食べる部位や食べ方、量などが異なっていると予想される。植物にとっては、食べられる部位が果実なの種子なのか、若い葉なのか古い葉なのかなどといった違いで、その影響が大きく異なる。本研究では、3 種のサルがそれぞれ植物にとってどのような役割を果たすのか考察することを目的として、各霊長類種の採食行動の観察、および植物の季節変化の記録を行う。大都会に残存した森における動物-植物相互作用の研究結果は、希少種の保全のために重要な知見になるだけでなく、都市住民へのアウトリーチにもつなげることができるだろう。
<今回の渡航の目的> 国立アマゾン研究所(INPA)の方々への挨拶と意見交換、および調査地の下見を行うことによって、研究計画を練り直し、研究の基盤となる人間関係を築き、現地での暮らしに少しでも慣れておくことを目的とした。
具体的な目標としては、以下のものがあつた。 1. 実際に調査地の植物やサルを観察し、現在考えている計画を遂行できるか検討する(可能であれば、群れの追跡や定点観察など、本研究で用いる手法をいくつか試してみる)。 2. 植物を同定するための図鑑等のデータベースがどの程度利用可能なのかを確認する。 3. アウトリーチ活動のイメージを膨らませるため、「科学の森」が現在市民にどのように利用されているのかを確認する。
<活動内容> 指導教官の湯本貴和教授の同行のもと渡航した。湯本教授は 10 日間の滞在後帰国し、その後は現地調整員である市山拓氏のサポートのもと、報告者一人での滞在となった。 湯本教授の滞在中は、教授が WRC の幸島司郎教授とともに進めるフィールドミュージアム計画に関する種々のミーティングに私も参加させていただき、同時に INPA の先生方への面通しを行った。会議の合間には調査予定地の「科学の森」に入り、湯本教授の指導を賜りながら植物、サル、鳥などを観察した。また、近隣の生息地見学として、INPA の向かいに位置するアマゾン農村大学の研究棟や、マナウス市北東部にあ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

る保護林アドルフオドキも訪れた。

湯本教授の帰国後は、サル類の研究をされている INPA の Wilson 教授、アマゾン農村大学 Gordo 教授の学生たちと面会し、現在行われている研究などについて情報収集をメインに行った。また、大都市マナウスを離れ、広大な原生林の残る Mamiraua 自然保護区を訪れ、動植物を観察する機会も得た。雄大なアマゾンの風景、自然と一体化した人々の暮らしにも深い感銘を受けた。

<行程>

- 6/20 (Sat) マナウス着
- 6/21 (Sun) 休日 (買い物等)
- 6/22 (Mon) INPA 市山さん、Vera さんと面会。動植物の観察
- 6/23 (Tue) INPA 動植物の観察。フィールドミュージアム関連ミーティング
- 6/24 (Wed) INPA 動植物の観察。フィールドミュージアム関連ミーティング (Wilson さん・Gordo さんと面会)
- 6/25 (Thu) UFAM の森を Gordo さんに案内していただく。INPA 動植物の観察
- 6/26 (Fri) INPA 動植物の観察。フィールドミュージアム関連ミーティング
- 6/27 (Sat) 休日 (アドルフオドキ見学)
- 6/28 (Sun) 休日 (市場見学)
- 6/29 (Mon) INPA Beto さんに面会
- 6/30 (Tue) INPA Wilson さんの研究室を訪ね、学生さんに紹介してもらう。湯本先生帰国
- 7/1 (Wed) アマゾンカワイルカのエコツアーリズム体験
- 7/2 (Thu) Mamiraua 行き計画・準備
- 7/3 (Fri) Wilson さんの学生さんを訪ねる。
- 7/4 (Sat) Mamiraua 行き準備
- 7/5 (Sun) Mamiraua 行きの経由地 Tefe へ向かう (高速ボートで 12 時間)。
- 7/6 (Mon) ~ 7/8 (Wed) Mamiraua の友人宅に滞在。アマゾンでの暮らしを体験。森を案内してもらう。
- 7/9 (Thu) Tefe からマナウスへ、再びボートで 12 時間の移動
- 7/10 (Fri) Vera さんに旅の報告。ウィルソンさんの学生を再び訪ねる。
- 7/11 (Sat) 休日 (友人とマナウス観光→動物園、ビーチなど)
- 7/12 (Sun) 休日 (日系 1 世の方のお家へ遊びに行く。)
- 7/13 (Mon) Gordo さんの学生を訪ねるも、不在。明日のアポを取る。
- 7/14 (Tue) Gordo さんの学生と面会。
- 7/15 (Wed) あいさつ、宿舎の掃除など。
- 7/16 (Thu) ~ 7/17 (Fri) フライト。帰国。

<成果と課題>

目標 1 について：

「科学の森」に生育する植物、特に樹木について、多くの種について科や属がわかるようになった。熱帯の植物に詳しい湯本教授によるマンツーマン指導のおかげである。INPA 内の本屋にて、アマゾンの果実、ヤシ、鳥類についての専門書を入手することができた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

また、対象とする三種のサル（コモンリスザル、フタイロタマリン、シロガオサキ）すべてを観察することができた。毎朝研究所前の餌台にえさがまかれるため、そのタイミングにどの種も姿を現す確率が高いことがわかった。これは追跡調査をする際の重要なポイントになるであろう。また、シロガオサキの追跡および行動観察を試す機会もあり、十分に可能であることを確認した。途中で、サキが食べたと思われる果実の破片やマメのさやを見つけることもできた。

逆に、一度見失ってしまうとサルを見つけることは難しいこともわかった。今回は定点観察をやってみることはできなかったが、定点で待っていてもサルを観察できる可能性は低いと予想される。やるとすれば、サルにとって相当魅力的な樹種を選ぶ必要があるだろう。

目標 2 について：

INPA の Veto さんからの情報により、「科学の森」内の樹木にはナンバータグがついており、番号と種名を対応させたハンドブックが存在するということが明らかになった。また、植物標本庫にも案内していただき、研究で利用することを許可していただいた。

ハンドブックの入手を今回試みたが、叶わなかった。次回の渡航までに樹種の予習・復習をしておくことが望ましいため、入手方法を模索する。

目標 3 について：

数値的なデータとして、2014 年度、2015 年度の入園者数と大人子供の内訳を見せていただいた。また、みたところ子供を含む家族連れや、修学旅行のような形で大人数の学生がやってくる人が多いような印象を受けた。後者の場合は、ガイドがついていたようだが、どういった内容を解説しているのかまではわからなかった。今後は、来園者のニーズがどこにあり、どのような解説・展示が不足しているのかを調べたい。

その他：

前出の Wilson 教授には、ブラジルでの指導教官になっていただく了承を得た。調査許可を得るためにブラジル人研究者の協力が必要不可欠なため、大きな成果であった。また、向こうの学生たちと面会できたことで、「科学の森」に現在いる群れ数、類似研究の有無などを確認できたほか、今後の研究に欠かせない人間関係をスタートさせることができた。

課題としては、言語の問題が挙げられる。ブラジルには学生もふくめ英語を話せる人が少ないため、研究および日常生活を円滑に進めるためにポルトガル語を早急に身につけることが必要である。また、報告者は英語でのコミュニケーション能力も不足しており、先生方とも十分な意思の疎通ができたとは言えなかった。特に、目上の人に対する話し方、メールの書き方等について、より高いレベルの英語力を身につける必要性を強く感じた。幸運なことに、霊長類研究所には留学生が多く、さらに私の院生室にはポルトガル語話者が 2 人もいる。どんどん話しかけ、教えを請い、語学力を磨くつもりである。

また、今回報告者はアマゾンの暑さに適応できなかったためか何回も体調を崩してしまった。炎天下での調査に備えて、基礎体力の向上もはかりたい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

<写真>



左から順に、コモンリスザル、シロガオサキの雌雄、サキの食べのこし、フタイロタマリン。(いずれも「科学の森」にて)



左、アマゾンカワイルカと泳ぐエコツアーリズム。右、Mamirauaで滞在させていただいたコミュニティのご家族と。



左上、カヌーに乗って森へ。途中で昼ごはんのおかずの調達も行う。左下、釣ったピラニアのフライ。右、アマゾンの夕日

6. その他 (特記事項など)

今回の渡航は PWS リーディング大学院の支援によって実現しました。プログラムコーディネーターの松沢哲郎教授、事務の左海陽子さまを始めとする関係者の皆様に深く御礼申し上げます。また、海外渡航初心者の私を導いてくださった湯本教授、現地での生活において様々なサポートをしていただいた SATREPS 現地調整員の市山さん、お忙しいなか私のために時間を割いてくださった INPA の先生・学生の方々にも感謝いたします。ありがとうございました。